

氏 名	原田 宗忠
-----	-------

(論文内容の要旨)

本論文は自尊感情の揺れに関する臨床学的研究である。従来から自尊感情の揺れやすさは抑うつや自殺企図などに関係することが明らかになっている。しかし、自尊感情と精神的健康との関係や自尊感情に揺れがなぜ生じるかについては未だ不明な点が多い。本論文では、自尊感情の揺れを引き起こす要因と精神的健康に与える影響を明らかにするために、調査研究と事例研究が行われた。

序論において、自尊感情という概念について、Kant(1797)の「自己尊重」、James(1892)の「自己評価の感情」、Rogers(1944)の自己受容などの概念と心理的適応との関係の研究、Rosenberg(1965)やCoopersmith(1967)による測定可能な尺度の開発等、心理学の研究対象になっていった過程が論じられるとともに、近年の先行研究から自尊感情に影響する要因を抽出して、それに基づき、以下の調査研究がなされた。

第1部では、大学生を対象にした5つの調査研究がなされた。第1章では、117名を対象にした質問紙調査によって、自尊感情の揺れに与える要因を明らかにする前段階として、自己注目の持続に焦点を当て、自尊感情の高さと自己注目の特徴との関係が検討された。第2章では、243名を対象にして、中・長期的な自尊感情の揺れを引き起こす要因を明らかにするために3回の継続調査がなされ、自己概念と自尊感情の揺れとの関係が検討された。第3章では、2章と同じ対象者にバウムテストを実施し、自尊感情の揺れとバウムテストにみられる自己像との関係が検討された。第4章と5章では、短期的な自尊感情の揺れを引き起こす要因を明らかにするために、157名を対象に7日間連続して自尊感情尺度に記入する等の調査を行った。4章では、コーピングと自尊感情の揺れとの関係が、5章では、青年期の発達課題として重視されるアイデンティティの形成に与える影響が検討された。以上の5つの研究から得られた知見を基に、第6章で、自尊感情の揺れの特徴が検討された。

第1部の調査研究の結果、自己注目の持続によって自尊感情の高さは影響を受けるが、自己否定的な側面に注目が持続したとしても、肯定的側面にも目が向き、自尊感情が高まることが明らかになった。自尊感情の揺れと自己概念の関係、及び、自尊感情の揺れとコーピングとの関係からは、自尊感情の揺れは自己概念の豊富さによって左右されること、情動を自分で抱えながらもその情動を十分に消化できないまま葛藤することによって自尊感情は揺れやすくなることが示唆された。また、自尊感情の揺れはアイデンティティの形成には直接は影響を与えないものの、自尊感情の高さを媒介して、間接的にアイデンティティの形成を促す可能性が示唆され、自尊感情の揺れを否定的にのみ捉えることはできないと考えられた。さらに、バウムテストにみられる自己像からは、青年期においては、現実の自分の姿を認める側面が存在し、両者の間で自尊感情は揺れ動くものの、自我境界が大きく揺らぐ様子はみられなかった。

第2部の臨床的な研究においては、勝敗によって自尊感情の大きな揺れ動きを見せた児童養護施設に措置された3人の児童に対するプレイセラピー事例が取り上げられた。第7章では、揺れない場所では強い緊張を感じて動けなくなるが、年下の子

に手をあげるなどが見られた4歳男児との5年1ヶ月の経過、第8章では、チック症状があり、些細なことでパニックになったり、他児に乱暴する6歳男児との2年6ヶ月の経過、第9章では、無気力と抑うつを呈した12歳の女児との2年2ヶ月の経過が提示され検討された。3人はともに、勝負の際に自分の強さを誇示する一方で、負けそうになるとズルや大泣きをするために対人関係が上手くいかないという問題を抱えていた。

3人の児童は、次第に自尊感情が安定し、問題とされていた状態も改善されていたことが施設職員からも報告されたが、プレイセラピーでは、ゲームにおける勝敗に対する強い拘りがなくなった。これらの3事例の過程を検討することによって、自尊感情の揺れを引き起こしていた要因と、自尊感情が安定していく際に重要であった心理的課題について、Klein, M. の精神分析理論に基づいて検討された。また、3事例は、施設職員と心理職との連携が重視して実施されたが、それが自尊感情にどのように影響を与えたか考察された。

結果として、自尊感情が安定するためには、ありのままの自分が肯定されるという安心感が生まれることが重要であると考えられたが、自尊感情が揺れる場合であっても、その揺れがKlein, M. のいう「迫害不安」によるのか、「抑うつ不安」によるのかによって、心理的課題が異なることが示された。また、施設職員と心理職員との連携は、日々の生活で児童の心理的状态を適切に把握した支援を行うことが可能になり、見守られているとの安心感の形成をさらに促進することにつながったと考察された。しかし、連携することは、子どもが自分の知らないところで情報が漏れるという不安を感じさせることにもなる可能性があり、連携の肯定的な面と否定的な面を考慮することの重要性も示された。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、自尊感情の揺れに関する臨床心理学的研究である。心理療法では、自己の内面に目を向けていくことにもなるが、近年の認知に関する心理学的研究では、このような「自己注目」は自尊感情に揺れを生じ、抑うつ状態につながるので、避ける方が良いとの考えが示されている。こうした自尊感情の揺れについて、本論文では、調査研究と事例研究の両面から研究がなされた。

まず、序論において「自尊感情」という概念について、Kantの「自己尊重」に源を持つこと、心理学としてはJames, W. が「自己評価の感情」として最初に取り上げ、その後、Rogers, C. が「自己受容」という概念を提示して心理的適応との関係の研究を開き、Rosenberg, M. らによって、測定可能な尺度の開発がなされたこと等、近年の調査研究に至る流れが示されるとともに、臨床の研究として、Freud, S. やKohut, H. などを中心とする精神分析理論からの「自己愛」概念や治療論的観点について詳述されており、これら先行研究については、丁寧になされていると評価された。

第1部の大学生を対象とした調査研究では、自己注目・自己概念・コーピング・アイデンティティ等との関連が明らかにされた。自己注目の持続と自尊感情の関係については、自己の否定的な側面に注目が持続しても、肯定的側面にも目が向き、自尊感情が高まること、また、自尊感情の揺れと自己概念やコーピングとの関係では、自尊感情の揺れは自己概念の豊富さに左右されるが、情動を抱えながらも消化できないまま葛藤することによって、自尊感情は揺れやすくなることが示され、さらに、バウムテストによる検討では、青年期においては、理想的な自己に向かおうとする側面と現実的な自己の姿を認める側面との間で自尊感情に揺れが生じるが、通常の場合、自我境界が大きく揺らぐことはないことが示唆された。アイデンティティの形成については、自尊感情の高さを介してアイデンティティの形成を促す可能性があることが示された。

以上の調査研究の検討においては、大学生のみを対象としているという限界はあるが、自尊感情の揺れが一概に否定的には捉えられないことを様々な側面から明らかにしており、人間の内省力がもつ可能性や、揺れにおいてこそ新たなあり方が生まれるという重要な観点を示すものとなった。また、このことは、セラピストの関係性を基盤とした自己探求の場である心理療法において、自己の否定的側面との出会いが生じることが多様なあり方への自発的な気づきをもたらすという臨床的知見を、調査研究から裏打ちする結果といえよう。

次いで第2部では、児童養護施設に措置されている3人の児童のプレイセラピー過程の事例研究が取り上げられた。(1)慣れない場所では緊張が強くなり、夜尿や年少児への乱暴も見られた4歳男児との5年間を超える過程、(2)チック症状もあり些細なことでパニックが生じる6歳男児との2年6ヶ月の過程、(3)無気力と抑うつを呈した12歳女児との2年2ヶ月の過程の3事例が検討された。3人とも勝負の際に、自分の強さを誇示する一方で、勝負に負けそうになるとズルや大泣きをするた

め対人関係がうまくいかないという問題を抱えていたが、プレイセラピィの場でもゲームなどの遊びを好む時期を経た後、勝ち負けに対する強い拘りがなくなり、ズルなどもみられなくなった。プレイセラピィは、毎朝、施設職員との話し合いをしてから開始されたが、当初、問題とされていた状態も軽減されていったことが施設職員から報告されている。

これら3人のプレイセラピィの経過の検討によって、自尊感情の安定は、ありのままの自分が肯定されるという安心感を基盤とすることが示されるとともに、自尊感情の揺れについて、Klein, M. のいう「迫害不安」か「抑うつ不安」のどちらかの水準かによって、心理的課題が異なってくることが示された。このことは、措置児童の大半が虐待などの不適切な養育環境にあったという今日の状況において、生活をともにする施設職員がその対応に困ることが多く、職員が児童の心理的課題の水準を理解し易く説明するという連携が心理職の責務であるという観点によるものである。しかし、こうした連携は、情報が漏れる不安を子どもに感じさせることにもなるため、子どもの内的世界を守りつつなされるあり方が本研究において模索されたのである。児童の安心感の形成が促進されたということは、適切な連携がなされたことを示していると考えられた。

以上、調査研究と事例研究から、自己の否定的な側面との出会いのあり方について意義深い知見が示された。しかし、第1部の調査研究と2部の事例研究のつながりが不十分であること、とくに、調査研究では、自尊感情を構成する下位要素が捉えられていないために、力動的な見方につながりにくくなったこと、自尊感情という測定可能な概念は、そこから漏れるものを一つの概念に閉じ込めてしまうおそれがあること、揺れについて、自然変動だけでなく関係性で揺れるという視点が入っていないこと、事例研究に他の年代とくに青年期が取り上げられていないこと、精神分析概念の使い方が厳密さに欠けること等の問題点が指摘された。しかし、これらの指摘は博士論文としての研究の意義を損なうものではないと考えられる。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成21年2月12日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。